

病害虫発生予察情報(3月予報)

令和8年2月25日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (3月の県平均平年値)	予報の根拠
茶	赤焼病	発生量：少 (発病葉数 0.06 枚/1.25m ²)	2月上中旬発生量：少 (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	カンザワハダニ	発生量：やや少 (樹冠面寄生葉率 1.1%)	2月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
トマト	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 10.1%)	2月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 5.8%)	2月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	発生量：やや少 (発病株率 0.1%)	2月中旬発生量：少 (－) コナジラミ類発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	コナジラミ類	発生量：並 (寄生株率 10.3%)	2月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
たまねぎ	灰色腐敗病	発生量：やや多 (平年発生なし)	2月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	腐敗病	発生量：やや少 (発病株率 5.1%)	2月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発生量：並 (寄生株率 34.8%)	2月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 2.2%)	2月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	うどんこ病	発生量：多 (発病株率 0.7%)	2月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	炭疽病	発生量：やや少 (発病株率 1.3%)	2月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	アザミウマ類	発生量：やや多 (寄生株率 11.1%)	2月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：やや少 (寄生株率 2.3%)	2月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	ハダニ類	発生量：地域により差がある 東部・中遠：多 中部：並 (寄生株率 12.9%)	2月中旬発生量：地域により差がある 東部：やや多 (＋) 中部：少 (－) 中遠：多 (＋) 病害虫防除員報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

静岡県病害
虫防除所 HP



静岡県病害虫防除所 HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【茶】

<生育の概況>

2月上中旬の巡回調査では、寒害と思われる症状の発生は認められなかった。防除員からは、少雨により葉色の悪い茶園の報告が複数あった。

●赤焼病

予報の根拠

- ・2月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は0.04枚/1.25㎡（平年0.07枚/1.25㎡）と、平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・幼木園や「つゆひかり」、「おくひかり」は特に本病に弱いので発生に注意する。
- ・昨年発生が見られた茶園や常発茶園では、3月上旬に薬剤による防除を行う。発生が広がるようであれば、1回目防除の20日後を目処に追加防除を行う。
- ・本病は、暴風雨などで傷害を受けると発生が助長される。現在、発生が見られない茶園でも、これからの発生に注意し、発生が見られたら早めに防除する。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・2月上中旬の巡回調査では、樹冠面での平均寄生葉率は0.2%（平年0.5%）、裾部での平均寄生葉率は0.9%（平年1.3%）と、平年より少なかった。
- ・巡回時の休眠調査では、調査した雌成虫のうち平均80.2%（平年85.8%）が休眠しておらず、産卵を始めている。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早めに防除を行う。葉裏に薬液が十分届くように散布する。
- ・裾部の葉に寄生が見られる茶園では、発生に注意し、ハダニが樹冠面に上がってくるようであれば早めに防除を行う。

【トマト】

<生育の概況>

生育はやや遅い。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.7%（平年6.9%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。なお、ハウスの密閉は多湿となりやすく、本病の発生を助長するため注意する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気

を早めに行い、施設内の除湿に努める。

- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。
- ・ 発病した果実や茎葉の表面には病原菌の胞子が多量に形成されて伝染源となる。そのため、発病部位および残さは速やかにほ場の外に持ち出して処分する。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.4%（平年6.5%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温が高いため、本病の発生をやや助長する。なお、ハウスの密閉は多湿となりやすく、本病の発生を助長するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 葉かび病については、抵抗性品種（CF-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.8%）と平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類の平均寄生株率は6.0%（平年8.5%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年は高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖が助長される。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・ 本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ 収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させる。また黄色粘着板を設置し、本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。
- ・ 多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.0%（平年8.5%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本種の侵入を抑制するため、施設開口部への防虫ネット（目合い0.4mm以下）の設置や、既設防虫ネットの点検・補修を行う。
- ・ 葉裏における成幼虫の寄生状況を観察するとともに、黄色粘着板における誘殺数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年に比べ遅れている。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発生なし）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温が平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また、本病は例年3月までの巡回調査では発生が確認されていない。

防除対策

- ・ 罹病株がある場合には、早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分することで来年度の伝染源にならないようにする。

●腐敗病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.5%）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温が平年より高いため、本病の発生をやや助長する。なお、例年3月は気温の上昇に伴い本病の発生が増加するため注意が必要である。

防除対策

- ・ 収穫時期を迎えているほ場では、できるだけ降雨の前に収穫し、降雨後は、鱗茎が十分乾いた後に収穫する。
- ・ 発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ・ 収穫後の植物残さは本病の伝染源となるため、1ヶ所にまとめ、ビニールで被覆し菌を死滅させるなどして適切に処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は21.4%（平年27.9%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫期を迎えているほ場では、特に防除の必要はない。収穫まで期間を要するほ場では発生に注意し、密

度が高まる前に薬剤防除を実施する。

- ・株元の葉と葉の隙間に多く生息しているので、その部分に薬剤がかかるように丁寧に散布する。また、周辺の収穫期を迎えているほ場に薬液が飛散しないように、風のない時に散布する。

【いちご】

＜生育の概況＞

病害虫防除員からの報告によると、生育はほぼ平年並。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年0.6%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。
- ・曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる薬液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、一部ほ場で多発していたことから、平均発病株率は1.1%（平年0.6%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、予防に努める。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。
- ・発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため、速やかに除去し、ハウス内に放置しない。
- ・多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第5号（いちご うどんこ病）」](#)も参照する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年1.1%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病の生育適温は28℃前後であり、高温・多湿条件下で発生しやすい。
- ・気温の上昇に伴い病徴が再び進展するため、本ほでの新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。

- ・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培土も含めて抜き取り、ほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処理を行ってから処分する。
- ・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。
- ・薬剤感受性の低下が疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC: 1）、QoI 殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤耐性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1～11）を使用する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.3%（平年5.6%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取った後、ほ場外に持ち出し、ビニール袋で密閉するなどして適切に処分する。
- ・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため開花前に除去する。なお、開花後の雑草等の除去は、本虫の飛来を助長するため注意する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第6号（いちご アザミウマ類）」](#)も参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.5%（平年1.7%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・新葉等における寄生状況を観察し、初期防除に努める。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は13.8%（平年14.1%）と平年並だった。ただし、地域別では、中部で5.8%（平年22.2%）と平年より少ないものの、東部で8.8%（平年7.5%）と平年よりやや多く、中遠で26.8%（平年12.6%）と平年より多かった。
- ・いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について1名が「多い」、2名が「やや多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤の多くは卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。

- ・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

【稲】

<その他病害虫>

●いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・[「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」](#)に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・他県ではいもち病のQoI剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

- ・県内全域で分布が拡大している。昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

●ナガエツルノゲイトウ

- ・近年、水田において、特定外来生物であるヒユ科多年生雑草のナガエツルノゲイトウの発生が増加している。水田で本種が繁殖すると、競合による収量の減少や農業機械の作業性の低下などがもたらされる。切断された茎や根で増殖するため、刈払い機等の機械除草ではなく、除草剤での防除の徹底する。
- ・防除に当たっては、[「技術情報第7号（水稲 ナガエツルノゲイトウ）」](#)を参照する。

【小麦】

<その他病害虫>

●うどんこ病・赤さび病

- ・うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残さで越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・昨年5月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は12.2%（平年20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も1.8%（平年15.1%）と平年より少なかった。
- ・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、赤さび病も「イワイノダイチ」「農林61号」より発生しやすい。
- ・窒素肥料の過多を避ける。

【かんきつ全般】

<その他の病害虫>

●かいよう病

- ・ 昨年は温州みかん、中晩柑類ともに本病の発生が多かった（[「技術情報第1号（温州みかん、中晩柑類かいよう病）」](#)）ため、3月中旬（発芽前）の防除を徹底する。
- ・ 罹病葉のついた夏秋枝は伝染源となるため、支障がない限り切除し、園内から除去する。
- ・ 伝染を防ぐため、防風垣、防風網の整備等を行い防風対策に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和8年2月19日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 2月21日から3月20日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。また、向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みですが、これまでの少雨の状態を解消するには至らない可能性があります。
向こう1か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高いの確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	30	50
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	40	30	30
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	40	30	30

【予報の対象期間】

1か月	:	2月21日(土)～	3月20日(金)
1週目	:	2月21日(土)～	2月27日(金)
2週目	:	2月28日(土)～	3月6日(金)
3～4週目	:	3月7日(土)～	3月20日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>